



## イスラエルへの旅

公益財団法人 資本市場研究会理事  
衆議院調査局財務金融調査室客員調査員

湯本 雅士

イスラエルへの旅を思い立ったのは2019年の秋ごろである。既にコロナの影が忍び寄っており、ガザでは例によって投石などの小競り合いが続いていた。家人は危ぶんだが、まだ身体が利くうちに、旧約の、そして新約の地でもある彼の地を一度は見ておきたいという学生時代からの想いが勝ちを制した。

「冒険」は報われた。モーゼ終焉の地とされるネボ山からカナンを望んだ時、そこまで民を率いてきた彼の心中が想われた。エルサレム旧市街で、有名な「嘆きの壁」は実はローマ時代の遺物であると言われても、そこにソロモンが築いた大神殿の在りし日の姿を重ねてみることは難しいことではなかった。街中には、イエスという名の敬虔なユダヤ教の若いラビ（律法学者）の足跡がそこここにあった。二千有余年の時を経て、かつて彼が木の十字架を背負って喘ぎながら登って行ったVia dolorosa（嘆きの道）は、実は7メートルもの地下に埋もれていると言われても、その時の情景が自ずから眼前に広がるから不思議である。かのゴルゴダの丘も今や地下にあって聖地となり、彼の墓（蘇るまでの短い期間であったが）の跡には聖墳墓教会が築かれていた。ナザレの地ガリラヤ湖畔には、彼が大勢の人々に向かって行った「山上の垂訓」の場に記念の教会が建っていた。

と並べていくと、ただの名所旧跡の観光案内に

なってしまうが、それでは済まない所に現代イスラエルの大きな問題がある。ベツレヘムと言えば、キリスト生誕の地として人が必ず立ち寄るところで

あるが、それが高い壁に遮られたパレスチナ自治区の中にあり、そこに入るためには厳しい検問所を通り抜けなければならないことはその時知った。ヨルダン西岸の自治区には既にユダヤ人の入植が強行されており、もともとの住民を圧迫して問題となっていた。現代都市イスラエルの中にあつて、パレスチナ自治区は明らかに異質の場所であり、生活環境は雲泥の差で、このままではこの先どうなることであろうかと思われた。ガザに足を踏み入れることはなかったが、状況は大同小異、おそらくはより悪いのではないかと想像された。

あれから4年、予感は的中した。昨年10月7日に始まった惨劇は想像を絶する規模に拡大しつつある。ダビデは、ソロモンは、そしてあの若いユダヤ教の律法学者は、この状況を眺めて何と云うことであろうか。

